政治学者の永田町暮らし

櫻田 淳

〈第十一回〉

自民党総裁選挙は予想通り安倍晋三氏の圧勝に終わった。一方で、麻生氏の健闘も目立ち、安倍氏の「勝ち過ぎ」は免れた。「英雄」の後継者への期待は……

九月八日

自民党総裁選挙が告示された。既に党内大勢が「安倍支持」を表明していることもあり、安倍晋三候補優勢の流れが出来上がっている。こうした現状は、総裁選挙から「熱気」を奪っている。

五年半前、小泉純一郎氏が「自民党を変える」と絶叫した総裁選挙の折の「熱気」は、そのまま小泉総理の執政の「推進力」であった。そうであるとすれば、そのような「推進力」を持たない次期総理の執政は、どのようなものになるのであろうか。

九月十二日

民主党代表選が告示され、唯一、立候補を届け出た小沢一郎代表の無投票再選が決まった。最大野党の党首選挙にしては誠に寂しいものである。このような有り様では、「小沢以後」を託すに足る人材は、育つのであろうか。

小泉自民党総裁も、得票数が三桁に届かなかった二度の総裁選挙での「敗北経験」を経て、政治家としての地力を付けていった。

翻って、安倍晋三候補の優位は揺るがない自民党総裁選挙であるけれども、麻生太郎候補の人気が高まっているのは、注目すべき現象であろう。サイバー空間では、麻生候補を勝手に応援していると思われる人々の手によって、替え歌付き応援フラッシュ広告が製作されている。「走れ、走れ、アソウタロー、本命、穴馬、かき分けて……。走れ、走れ、アソウタロー、追い付き、追い越せ、引っこ抜け」。大いに笑ってしまった。こうして、政治家も脱皮していくのであろう。

九月十五日

午前、竹中平蔵総務大臣が小泉内閣退陣時に参議院議員も辞職すると伝えられた。竹中氏の議員任期途中の辞任を云々する向きもあるだろうけれども、氏は「小泉改革」の推進という一つの目的のために議席を得たのであれば、その目的が達せられた以上、議席を持つ必要もなくなったということであろう。竹中氏は、「ポリシー・インテレクチュアルズ」としての自分の「分際」をきちんと心得た人物であったといえよう。筆者は、竹中氏の決断を見事な「引き際」と評したいと思う。

昔日、青年の夢は、「末は博士か大臣か」であった。多くの政治家にとって、大臣の椅子は、血反吐(ちへど)を吐くような選挙を五、六度も経て漸く手にできるものであれば、既に三つの大臣の椅子に座った竹中氏に対して、疎ましさと妬みの入り混じった眼差しが向けられたであろうということは、容易に想像できる。

筆者は、竹中氏の刻んだ歩みの意味は、今後の日本にとって大事なものであろうと思っている。様々な「知」に支えられた「ソフト・パワー」の意義が強調される世界の中では、「アカデミズム」と「実務」の垣根を取っ払って活動できる人材は、どうしても必要である。日本には「竹中平蔵」級の人的ストックが少なくとも五〇〇人は要るのである。

九月二十日

自民党総裁選挙の結果は、有効投票総数七〇二票中、安倍晋三候補四六四票、麻生太郎候補一三六票、谷垣禎一候補一〇二票というものであった。

この結果は、自民党にとっては、「よい結果」であろう。麻生氏も谷垣氏も得票を三桁に乗せたお陰で、「安倍のスペア」として、それなりの政治的影響力を確保することができる。安倍氏にとっても、この勝ちは、「六分の勝ち」である。当初、伝えられたように、五〇〇票以上を獲得するなどという事態になったら、その「勝ち過ぎ」が懸念されたかもしれないけれども、この程度の「勝ち」で終われば、安倍氏の政治運営には慎重さや細心さが備わるであろうと安心できる。

筆者には、「小泉純一郎―ユリウス・カエサル」、「安倍晋三―オクタヴィアヌス」の類推が浮かんでいる。「稀代の英雄」であったカエサルの後を継いだオクタヴィアヌスの統治は、地味なものであったと評される。ただし、その地味な統治が、ローマという「帝国」と「パックス・ロマーナ」（ローマの平和）の基盤を創った。安倍次期総理には、余計な理念やイデオロギーを先走りさせず、ただ日本の「普通の国」としての基盤を確立させることに尽力してもらえれば、それでいい。

イラスト◎浅妻健司

さくらだじゅん　政治学者・東洋学園大学兼任講師

※記事・写真等は中央公論新社の許諾を得て転載しています。著作権は中央公論新社に帰属。記事、写真等の無断転載は一切お断りします。